第３期「確かな学力育成プラン」検討委員会　議事録（第１回検討委員会）

◆日　　時　令和４年４月２８日（木）午後２時から

◆場　　所　上杉分庁舎　１２階　第１会議室

◆出席委員

氏　　名	現　　職　　等	備　　考
児玉　　忠	宮城教育大学　教授	委員長
稲垣　　忠	東北学院大学　教授	副委員長
我妻　良行	片平丁小学校　校長	
鹿野恵美子	東六番丁小学校支援地域本部　スーパーバイザー	
齋藤　孝志	株式会社サイコー　代表取締役	
齋藤　亘弘	八乙女中学校　校長	
佐々木　大	INTILAQ 東北イノベーションセンター長	
佐藤　真奈	仙台市ＰＴＡ協議会　副会長	
千葉　恵美	仙台市ＰＴＡ協議会　副会長	

◆配付資料

資料１　第３期「確かな学力育成プラン」検討委員会　委員名簿
資料２　第３期「確かな学力育成プラン」検討委員会設置要綱
資料３　「確かな学力育成プラン」２０１８これまでの主な事業の進捗状況
資料４　第３期「確かな学力育成プラン」の策定について
資料５　第３期「確かな学力育成プラン」検討委員会スケジュール
別紙１　第３期「確かな学力育成プラン」について（写）
座席表
参考資料１　仙台市教育構想２０２１
参考資料２　仙台市確かな学力育成プラン２０１８
参考資料３　仙台市確かな学力育成プラン２０１８　概要版

◆会議概要

１　開　　会
２　委嘱状・任命状交付
３　教育長挨拶
４　委員紹介
５　委員長・副委員長選出
６　検討依頼
７　報告・協議

（１）第３期「確かな学力育成プラン」検討委員会の運営について

事務局より検討委員会の運営について説明（丸山主幹）

佐々木委員：会議の公開について。傍聴したい方が来るのか，それともこちらから傍聴してほしい方に来ていただくのか。

事務局：広報課を通じて会議日等を広報している。それを受けて，報道機関による取材や市民の方の希望者が傍聴に来る場合がある。

（２）仙台市確かな学力育成プラン２０１８の概要について

事務局より主な施策の進捗状況を報告

児玉委員長：仙台市が定める確かな学力の育成に向けて，Ａ～Ｆを実施している。その中から主な施策の進捗状況の報告を受けた。進捗状況なので，成果だけでなく課題もある。成果は引き継ぎ，課題については次期に向けて何とか改善していきたい。

蓮沼室長：時間が限られており，いくつかピックアップしたものを説明した。今後，第２回までに委員の皆様には詳細なものを送付する予定である。

（３）第３期「確かな学力育成プラン」の策定について

事務局より策定に向けた方向性について説明（蓮沼室長）

児玉委員長：基礎学力をどう底上げするか，子どもたちの現状，学力も新しい時代に合わせて再定義が必要である。第３期プラン策定に係る大切なポイントとなる。

児玉委員長：2018 概要版について，本市が目指す「確かな学力」を新学習指導要領に合わせて再定義するということである。事務局として，これまでのＡ～Ｆの枠組みをどこまで変えていくつもりでいるのか。検証に当たるＦを除く，Ａ～Ｅは学校教育，家庭教育，地域連携等，教育をある程度網羅していて，全てを新しくするのは難しい。ただＤの自分づくり教育については，前回これを作った意図と，今後事務局としてどう見通しているかを聞かせてほしい。

蓮沼室長：時代は大きく変わっており，価値観が多様化している中で，学ぶということが，本来，自分のために学ぶ，自分の成長につなげるという自分の欲求，内発的な部分，学習意欲ということが大切だと考えている。プラン２０１８を作成の際，学習に向かう部分，自分はこうなりたいという部分を子どもたちにどのように持たせていくか。様々な社会体験・生活体験の機会を揃えていく必要があり，そのベースとなる体験や経験を学校教育で補充していくという考えがあった。そこを育むために社会の力を借りて，職場体験活動等を通して自分の中に夢や希望を持つきっかけとし，仕事に触れる中で学習意欲につなげていくという考え方である。

児玉委員長：これまでのフレームを基本としていくということで理解できた。もう一つ，仙台市教育基本構想 2021 の６つの基本方針というのがあるが，確かな学力育成プラン 2018」のＡ～Ｆとの関連性について，どう捉えたらよいか。

事務局から「教育基本構想 2021」の基本方針について説明・確認（蓮沼室長）

児玉委員長：「確かな学力育成プラン 2018」のフレームの中に「教育基本構想 2021」の基本方針が少しずつ散りばめられて関連付いているので，これをビルドアップするという形でまたＡ～Ｆができるという捉えでいいか。

蓮沼室長：施策が基本方針のどこに位置づけられるのかを確認して，バランスをとり，取り組みをもう一度見直すイメージを持っている。

佐々木委員：これだけたくさんの施策をやってきての結果はどうか。どのような成果があったのか。

蓮沼室長：学力という点ではある程度の成果が出ていると思う。ただ，どの施策がつながったのか，はっきりと断言できない。様々なものが多面的に結び付いている。学校の環境や子どもたちの状況が違い，効果が出ている部分が各学校でも違う。しかし，総じてこういった形のプランを策定し、様々な取組を多面的にやっていくことがこれからも必要だと考えている。さらに学力下位層や意識のギャップについて，これまでに気付いていない何かがあるのではないか。個人的には自分づくり教育が何らかのカギになるのではないかと思う。新たな課題や学力の底上げ等には，自分づくり教育の部分が関わっていくと感じている。このような点について皆さんと議論していきたい。一方で，学校の多忙化の部分も意識したい。学校に負荷がかかるとやはり機能しない。整理できるところは整理していきたい。

佐々木委員：研修など力をいれていると聞いていたが，もしかしたら先生たちが忙しすぎてこなしきれないのではないかと思う部分もある。個人的に今後の展開として，必ずしも点数を高めればいいだけの話ではないと思っている。最終的に子どもたちが希望をもってやりたいことをやれる環境，蓮沼室長が言った内発的にこれをやりたいという思いが出てくれば必然的に学力向上につながっていくと思う。そのあたりの仕組み作りが一番のポイントと感じている。

齋藤（孝）委員：大学生の就活セミナーを行ったり，定期的に新卒者をとったりして，若い人たちが，すごく自信がない，未来に希望が見いだせていないと感じる。一方で，すごく真面目で，昔より意識が高い子たちも多く，二極化していると感じている。社会は特別優秀な人だけで構成されているわけではないので，いわゆる下位層３割の子たちも幸せに生きる方法を伝えていくことの方が大切と思う。最近の若い子たちを見ていて自己受容ができていないと感じる。先生たちや親など，周りが見ている自分の姿を自分の姿として捉えられず，そこのギャップに苦しみ，どんどん凝り固まり，孤立していく部分みたいなところをすごく感じている。社内の研修ではそこを取り除くようなことをやってはいるが，時間がかかる。理想の自分が自分であって，目の前の自分が自分ではないと感じている。この部分とどう向き合っていき，そういった子どもたちの層がどう社会に通用していくのかという議論をしていかないと，いくら点数をとっても，そんなに役に立つものではないと思っている。

児玉委員長：大事な視点である。あるべき自分に今の自分を引っ張ってもらうという施策だけでは自己肯定感は育ちにくい。まだ足りないのだと思い続けることだけを未来の原動力にするのではなく，今いる現実，自分を見つめ，失敗してもまた頑張ればいい，そういうゆるやかなところが，下位層３０％の子どもたちに必要である。すごく大事な視点を言っていただいた。指導法を改めれば点数は上がるのかもしれないが，指摘いただいた意識のギャップは変わらないかもしれ

ない。学力の低い子どもをどうするか，意識のギャップをどうするかという点でとても大切なことを話していただいた。

齋藤（孝）委員：例えば，足が速いとか野球が上手とか，そういうことで自分を高めることができれば，どこかで学びに向かう可能性がある。大人になってから気付いて，学び直して，起業しましたという話も聞く。でも，そういったことは，子どものころに行われていたほうがいいと思う。学ぼうと思って学び始めれば，数年のギャップは埋められるはずである。

稲垣副委員長：今までの話を聞きながら自己肯定感について改めて考えていた。軽やかな自虐というか，ダメな自分も受け止めることも含めて。何か言われたらすぐに折れてしまって，できない自分を受けとめることが難しくなっている。絶対間違ってはいけない，絶対できるようにならなければいけないという思いが強すぎるがため，ミスをする事をこわがってしまう。それでは様々なチャレンジは生まれてこないと思う。自分を認めるという部分については，ぜひやっていきたい。「たく生きプログラム」については，それらがどう機能していたかという検証がうまくできていなかったと思う。100 以上のプログラムがあることはいいことで，作ったときは学習指導要領の先駆けだったが，今では追いていかれつつあるので，どうキャッチアップしていくか。そういったことを踏まえて 3 点コメントをする。

仙台市が抱えている教育問題はたくさんある。もちろん反映させていきたいが，他のプランと今回の確かな学力育成プランの関係について整理されていると議論する方向性が定まる。

確かな学力という言葉が古い概念である。今，我々がやろうとしているのは「生きる力」の育成で，「確かな学力」は若干ずれがあると感じている。「確かな学力」という言葉は残す必要があるのか，変えてもいいのか，学習指導要領の中に「確かな学力」はもうないので，そこを含めた形で提案したほうがよいと思う。「確かな学力」というままでいくと難しい気がしている。

子どもたちの一人一人をどうしていこうというより，先生が何をしなければいけないかという部分が若干濃すぎる。令和の日本型学校教育では，子どもたち一人一人にどう対応していくかというものが全面に出てきている。それを結ぶのは「個別最適な学び」という言葉である。基礎学力が大変だという話と，自分の興味関心とキャリアという話の両方とも扱える概念は個別最適しかない。それをしっかり受け止めたような出し方をして，仙台らしさを生んでいくきっかけになればいいと思っている。

我妻委員：最終的には「学力ってどうとらえるの」という部分がとても大きいと思う。前回出ていた基礎的知識や応用力，確かな学力について，検討委員会としてどう捉え，新しいプランの中に仙台市として目指していく学力はどんなものなのか

明確にしていきたい。その中にはもしかしたら，多様な人たちとかかわる力や自分なりに工夫して行動していく力，いわゆるペーパーテストで測れる学力ではない学力を仙台市としてつけていくといった方向性が明確になっていけば，それにあったものができていくと思う。これまでは，テストの点数をとるための施策が中心に位置付けられてきた感じがしている。何が起きてもその中でやっていけるというのは，学んだことをやれる力ではなくて，学んだことから自分なりに生み出して何かやっていくという力である。そういう力をつけることはとても難しいことだと思うが，その力とは何なのかというのを，検討委員会で検討して，色々な考えを出し合って固めていけたらと思う。

佐藤委員：現行プランをどのように生かして次のプランにつなげていくかとなると思う。それぞれの施策が子どもたちにどのような影響があったのかという部分がはっきりしなかったため，もやっとしている。資料のどれを読み込めば，「確かな学力育成プラン 2018」の成果として，子どもたちの姿に結び付いているのかを確認できるのか教えてほしいと思う。これだけが全てではないとは思うが，「確かな学力育成プラン 2018」のやってきたことや成果が分かった上で，これからの話をしていきたいと思う。

児玉委員長：様々やってきたことの中からあえて選んで話してくれたと思うので，それ以外について，我々は分からないところもある。次回までさらに整備して示してほしい。改めて思ったことは，これからの時代にどのように対応するかということのために，この会議がある。時代に対応できたかどうかは，その時は分からず，10 年後にならないと分からない。さらに言えば学力調査で測れるのは，限定的な部分である。ただ行政としてはそれを何らかの根拠にしなければならず，分析の対象とせざるを得ない一面もある。測れないけど未来を見据えて幅広にシステム化しなければならないことがきっとある。複眼的な準備をしながら，この仕組みをつくっていければいいと思う。

（４）検討委員会スケジュールについて

事務局より，今後のスケジュールについて説明。

（５）その他

事務連絡

８　閉会

この議事録について，会議の内容と相違ないことを認める。

令和　4　年　6　月　9　日

第３期「確かな学力育成プラン」検討委員会

署名委員　我妻良行